

ハンセン病療養所における盲人組織の設立

— 1950年代を中心に —

金 貴粉

本稿の課題—問題の所在

現在、全国のハンセン病療養所には盲人会という組織が存在する。盲人入所者の平均年齢は療養所入所者の高齢化に伴い、2010（平成22）年3月時点で85才となっている。現在の盲人会の活動は、年に2回の厚生労働省への書面による陳情の他、カラオケや慰安会など会員同士の交流が主なものとなっている⁽¹⁾。

かつて盲人会はハーモニカバンドや盲人将棋などの文化活動をはじめ、点字の習得、療養所内の看護・介護の改善を求める運動を積極的に行う、いわば互助的な盲人組織として活動していた⁽²⁾。その活躍はここで挙げるまでもないほどである。

後述するように、盲人組織は1930年代には、第四区療養所（現大島青松園）と栗生楽泉園、光明園（現呂久光明園）に設立されている。しかし全国各園に盲人組織ができたのは、戦後になってからであった。その背景には新薬プロミンの登場や、全国ハンセン病療養所の患者組織である全国ハンセン氏病患者協議会（全患協）の結成、そしてらい予防法闘争があった。

多磨盲人会設立10周年を迎え、盲人会会長であった汲田冬峯は1965（昭和40）年の設立当時を以下のように振り返っている。

省みまするに、昭和30（1955）年1月に発足致しました当時は、盲人の位置も低く、文化面においてもさして見るべきものはなく、僅かに棋譜を頼りに将棋を指すか、短文芸によって気持ちを慰める程度でありましたが、盲人会の発足と同時に舌読、指導による点字の講習会、ハーモニカバンドの結成、並びに

コーラス団の誕生等により自ら演奏して喜びを味わったり、或いは晴眼者の奉仕によって良書の鑑賞、また機関誌の道標を出すなどして、私たちの生活や考えているところを、多くの人々に知って頂き、理解して頂くことの如何に必要なことかを、身をもって知り得た次第であります⁽³⁾。

盲人会の設立以後、こうした会独自の活動が次々と展開され、園内はもとより、園外の人々ともつながる活動となったことはすでに多くの人が知るところである。しかし、盲人会が今日存在していることについては自明のこととして取り扱われる傾向が強く、その理由や背景についての考察が十分になされているとは言い難い。ハンセン病療養所に、患者組織である全患協とは別に、何故、盲人だけの組織が必要だったのか。その背景は何なのか。それらの点についての言及は当事者によるものとどまるのが現状であり、考察も十分ではないと思われる。

そのような研究状況を踏まえて、本稿では、各地のハンセン病療養所で盲人組織を結成するに至った理由や背景、結成に向けた過程について史料をもとに明らかにしていくことを課題とし、その作業を通して療養所におかれた盲人たちの思いや組織設立の歴史的意義などについても言及していきたい。

1. 戦前の盲人組織

全国の療養所で盲人組織が最も早く結成されたのは第四区療養所（現大島青松園）である。1932（昭和7）年、「杖の友会」と命名されたその会

(1) 盲人会の活動等については、国立ハンセン病資料館平成23年度春季企画展「かすかな光をもとめて—療養所の中の盲人たち—」において、展示および企画展図録にて紹介した。

(2) 本稿で用いる「盲人組織」とは、ハンセン病療養所の中で盲人によって立ち上げられた会のことを指し、名称については、各園において使用されたものを時代に合わせて用いることとする。

(3) 汲田冬峯「創立十周年に当たりて」（『道標』第20号 1964年1月）、2頁。

は、盲人相互の親睦、歩行や食事などの修練ならびに各種の協議を行うことを目的として設立された。これが、日本で初めて設立されたハンセン病盲人患者の組織である。

栗生楽泉園でも、1936（昭和11）年に盲人組織「杖の友会」が設立されている。盲人同士の交流を深めるところから始まったこの会は、その後、包帯作業の盲人への斡旋や道路改修、盲導施設の整備へと要求が高められていった⁽⁴⁾。

邑久光明園では、室戸台風によって壊滅した外島保養院患者が光明園に戻った後で「心光会」という盲人同士で集まる会が設立された。それは、盲人のリーダー格的存在であった安波光陽が1939（昭和14）年に作った組織で、彼はそのまとめ役として活躍した⁽⁵⁾。ただ、その内実は、「春秋2回、わずかな茶菓をもらい、その一日を蓄音機でも聞いて遊んだくらいのことであった」⁽⁶⁾とされている。

邑久光明園入所者自治会発行の80年史『風と海のなか』によると、当時、心光会は自治会から公認団体としての扱いを受けていたが、その活動記録は一切残されていないという。ささやかな慰労会を催したこともあったが、盲人会の前身と呼べるほどの会ではなかったと言われている⁽⁷⁾。どちらかと言えば、慰安という要素が強い団体であったといえる。

戦前の盲人組織は、どのような理由によって発足するに至ったのだろうか。大島青松園盲人会発行の50年史『わたしはここに生きた』には、盲人会発足以前の生活について次のように記されている。

不自由寮といっても設備は軽症寮と同じで、盲人のための配慮は何もなされていなかった。違っていたことは内側から顔が洗えるように洗面台があり、小さな水がめと柄杓

がおかれていた。目が見えなくても治療棟へは行かなくてはならず、そのためには探り杖が必要であるが、杖は医務課からも給品所からも支給してはくれなかった。それで友人や知人に頼んで、山からムロの木を切ってきて作ってもらっていた。

軽症者の看護によって食事時の世話や便所、廊下、外まわりの掃除はしてくれていたが、部屋の中の掃除は、目が見えて箒の使える者がしていた。21畳の大部屋で10人以上の者が生活しているなかに盲人がたいてい2、3人まじっていて、日常のこまごましたことは同室の晴眼者の手をわずらわさなければならなかった。寝起きを共にしている者の間でそれはごく自然なものであったが、盲人は気を遣って早く起き、衣類を身に着け、夜具をしまうなど、少しでも迷惑をかけないようにしていた。

そうした有形無形のものが心の襷につもり、そっと自分の生命だけをみつめていたい…との思いもあった⁽⁸⁾。

不自由者であっても雑居生活を強いられる療養所では「盲人のための配慮」は一切なく、不自由な状況のままで生活しなければならなかった。しかし、その状況を打破しようとする盲人が、会の設立に向け動き出したのである。

だが、ひとりの世界に埋没する凍土からは何も芽ぶかないことを知る盲人有志によって、現在目が見えない自分たちだけのことでしてとらえるのではなく、広い立場に立って会を組織しよう、という方向にかたむき、準備委員会を設けることになったのである。ちょうど一区画に不自由者寮があったので、準備委員は盲人たちの意見を聞きながら集会を重

(4) 栗生楽泉園患者自治会編『風雪の紋』1982年、381頁。

(5) 邑久光明園盲人会編『白い道標』1995年、16頁。

(6) 伯々上清一「外島保養院時代の盲人を巡って」（邑久光明園盲人会編『白い道標』1995年）、32頁。

(7) 邑久光明園入園者自治会編『風と海のなか』1989年8月、314頁。

(8) 赤沢正美「産声」（大島青松園盲人会編『わたしはここに生きた』1984年）、17-18頁。

ね、規約を草案し、会の名称を「杖の友会」としたのである。この時はまだ青年団に後援を頼んだわけではなかったが、積極的に規約作りの筆記なども手伝ってくれた。そして、杖の友会結成後は後援団体としてお世話下さることになったのである⁽⁹⁾。

このように、戦前の盲人会は歩み始めた。しかし、それは、前述してきたように、あくまでも慰安組織としての性格が強かったといえる。

2. 戦後における盲人組織結成の胎動

戦後になり、療養所は大きく変わった。その要因としてまず、ハンセン病を治すことのできる化学療法が登場したことがあげられる。1941（昭和16）年、特効薬であるプロミンの治療効果がアメリカで明らかにされ、日本においても1946（昭和21）年に東京大学の石館守三がその合成に成功した。それにともない1947（昭和22）年、療養所での治験を経て、療養所内でもプロミンによる治療が行われ始めた。

しかし、プロミンの治療には費用がかかり、経済的に恵まれている者しか受けることができなかったため、誰にでもプロミンをという「プロミン獲得促進委員会」が多磨全生園内において結成された。その後、プロミン治療のための予算がつき、次々と治癒する者が表れた。職員と一緒に野球に興じ、ラケットを握って広いコートを走り回る入所者の姿も見られるようになったという⁽¹⁰⁾。

また、全国のハンセン病療養所の患者組織である全患協も1951（昭和26）年に結成され、1952（昭和27）年には癩予防法の改正促進運動が始められた。運動が全国的に波及し、療養所内の雰囲気も大きく変わった。各園で次々と盲人組織が結成されていくのも、この時期であった。戦後、結成された盲人組織は以下の通りである。

星塚敬愛園「心友会」	1948年 5 月結成
菊池恵楓園「杖の友会」	1951年 5 月結成
長島愛生園「杖の友会」	1952年10月結成
駿河療養所「杖の友会」	1953年 4 月結成
松丘保養園「杖の友会」	1953年10月結成
邑久光明園「杖の友会」	1953年11月結成
東北新生園「杖の友会」	1954年 5 月結成
沖縄愛楽園「杖の友会」	1954年 5 月結成
多磨全生園「盲人会」	1955年 1 月結成
奄美和光園「盲人会」	1955年 6 月結成
宮古南静園「盲人杖の会」	1964年 7 月結成

結成順に見るとこのようになっており、1962（昭和37）年には、私立の神山復生病院「盲人会」も結成されている。また、ハンセン病療養所盲人組織の全国組織である、全国ハンセン氏病盲人連合協議会（全盲連）も1955（昭和30）年5月に結成された。ここでは、数園の盲人組織を取り上げ、その設立経緯および背景などについて詳細に見ていくことにする。

(1) 星塚敬愛園「心友会」

星塚敬愛園盲人会では25周年を振り返り、座談会を行った。その中で初代会長であった川辺行夫は、「（昭和）21年に同じ目を病む友に呼びかけてみましたが、今の様に民主化されていなかった故か私達自身にも自覚が足りなかったのか発会を見ずしてお流れになったことを思い出しますね」⁽¹¹⁾と語っている。この発言から、星塚敬愛園では盲人の会を1946（昭和21）年の段階で立ち上げようとしていたことが明らかである。

しかし、その時点では発会に至っていない。戦後まもない時期で、後の全患協結成や予防法闘争など入所者自身が立ち上がろうとする気運が起こる前であり、盲人による団体結成を自由に行うほどには「民主化されていなかった」ことが要因であると考えられる。また、盲人自身の「自覚が足

(9) 注8に同じ、17-18頁。

(10) 森幹郎『証言・ハンセン病』（現代書館、2001年1月）、189頁。

(11) 「誌上座談会 二十五周年を迎え盲人会の歩みを顧みて」川辺行夫発言（出席者：不動信夫、矢野幸二、川辺行夫、宮原景則、東一平、坂田輝夫、星恵二（司会）『始良野』第14巻5号 1960年10月）、29頁。

りなかった」という点、会結成の意味や目的が強く意識されていなかったこと、「人の手を借りなければならぬ自分たちなのに、要求を出すなど出過ぎたことはできない」という遠慮があったこともその一因として考えられる。

実際に星塚敬愛園で盲人による会が結成されたのは、2年後の1948（昭和23）年であった。前述の座談会では、川辺行夫が「当時の執行部評議会皆様の温かい理解の下に、三重苦の聖者ヘレン・ケラー先生にあやかって5月13日に発会をみた様な次第でした」と発言しており、入所者自治会役員の理解が、盲人の会設立のために不可欠であったということがわかる。そして発会にあたり、ヘレン・ケラーの存在が星塚敬愛園の盲人たちにも大きな影響を与えていたことが明らかであった。

栗生楽泉園の盲人の会である泉友会会長であった大谷信一も、「ヘレン・ケラー女史の来園を願望して」という文章を1948（昭和23）年3月発行の『高原』に掲載していることから、星塚敬愛園だけではなく他園の盲人にとっても、ヘレン・ケラーに対する深い敬愛の念を抱き、その存在に励まされていたことが明らかである。

1948（昭和23）年8月に、ヘレン・ケラーは2度目の来日を果たし、一般社会における盲人にとっても大きな影響を与えた。彼女は、2ヵ月の間に25回の講演を行い、この講演により13万人の聴衆が苦しい生活の中で勇気づけられ、盲教育・盲人福祉に多大な影響を与えた。そして来日前の1948（昭和23）年4月に文部省は前回来日の際の約束を果たすため盲教育の義務制を施行し、また円滑に来日を受け入れるべく、全国の盲人団体の統一が図られ、日本盲人会連合（日盲連）が結成された⁽¹²⁾。このニュースは、星塚敬愛園の盲人たちにも伝えられたのであろう。ヘレン・ケラーの存在に強く励まされることによって、2年前にはなかった気運が高まったと考えられる。

会の内実については、「会の方針とか発展とかはなく、園内放送を通じてクイズの募集とかレ

コードコンサート、それに晴眼者の奉仕による単行本の朗読等が大体の実情」⁽¹³⁾であった。この頃の会の性格は、生活改善のための要求をあげていくというよりは、慰安、娯楽としての要素が強かったといえる。しかし、療養所の生活を、盲人の立場から自らの手でよりよいものにしようとしたという点は、それまでの動向を考えれば大きな一歩であったといえるだろう。

（2）長島愛生園「杖の友会」

2007（平成19）年当時、長島愛生園盲人会会長であった伊勢学は、創立55周年を迎え、発足当初のことを次のように記している。

発足当初は周囲から「盲人が団体を組織してどうなるのだ。何をせ^マいと言うんだ」など、色々と冷ややかな言葉を耳にしたが、「いつかは分かってくれるさ」と会員は励まし合いながら、会員の生活向上と福祉向上のために幾多の試練と闘いながらも会の真実を訴え続け会発展に向かって努力して下さったお陰で、周囲の人たちも盲人会の真意をようやく理解してくれるようになったのです⁽¹⁴⁾。

長島愛生園では、伊勢の言葉のように同じ入所者から盲人組織の結成に対し、多くの反対意見が出された。

当時の状況について、盲人会の生川政郎は長島愛生園盲人会『点字愛生』144号において次のように詳細に記している。以下、重要な記述であるので、長文であるが引用することにしたい。

私が不自由舎に下がったのは、（昭和）22年の春であった。まず一番に医局の治療に行くために一人で行かねばならぬことが分かって、杖探りに歩くことを覚えた。今のように入所されてないというのに、盲導設備も不完全で、あちこちにマンホールの木の蓋が腐って

（12）谷合侑『盲人の歴史』（明石書店、1996年9月）、213頁。

（13）注11に同じ、川辺行夫発言、29頁。

（14）伊勢学「盲人会創立55周年に思う」（『点字愛生』174号 2007年10月）、1頁。

いて、足が落ち込む危険な道であった。洗濯は自分でしなければならなかった。麻痺した手で探りながら洗濯板に擦るので手に傷ができやすい。包帯をしていて傷が悪くなるのが分かっていながらしなければならなかった。やっと干したと思った洗濯物に血が付いていることを教えられてがっかりしたものであった。中央洗濯場では包帯、ガーゼや病室の病衣の洗濯等で手一杯であり、不自由者の物など手が回らなかったのである。…家からの手紙があった時などその代読や代筆にも苦労したものであった。このように色々困っていることを不自由者懇談会で取り上げてもらおうとしても、なかなか困難で、目の見えない者の意見など取り上げられるような雰囲気ではなかったのである。不自由者の生活は心に張りの無い毎日で、自分はこのままでよいのであろうか、また自分は何なのであろうか、盲人という者はこういうものなんだろうかと等とかがえるようになった。

プロミン治療が始まり、園内の雰囲気は一変した。しかし、前述のように長島愛生園においても盲人たちは取り残されていった。

選挙権が与えられて入園者の間にも国民の権利意識が高まり、プロミンの効果によって健康への自信を取り戻して、音楽や演劇文芸等のサークルもでき、活動も盛んになっていた。しかし盲人は部屋の隅に座ったままの生活が続いたのである⁽¹⁵⁾。

園内の娯楽として映画があった。しかし、目の見えない盲人は上映会に行くことができず、寮に取り残された。生川政郎は次のように続ける。

「盲人はどんなことをかंगाえているのだろうか。このままでよいと思っているのだろ

うか、聞いてみたいものだと思うとともに、このままではいけない、何とかしなければいけない」と思っていたところ、同じ入所者で目が少しよかった有本安夫が「そうだ。俺も目が悪いんだ、このままではいかん、何とかしようではないか。盲人の人に話しかけて賛成者を集めて、そんなものをまとめるようにしようじゃないか」と、不自由舎や夫婦舎の盲人を訪ねて回ることにした。しかし、入所者の反応は冷たいものであった。「お前ら何の用があつて来たのだ。めくらに何ができるというんだ。この暑い中うろうろしないで部屋で座っときな」、「めくらが集まって話をするって、頼みたいことがあつたら、不自由者懇談会に頼めばいいんだ」、「めくらの会を作るって、お前らそれで何かに利用しようとしているんじゃないか。俺は反対だ」などと、なかなか理解を得ることができなかった⁽¹⁶⁾。

しかし、一方では次のような意見もあったという。「それはいいことです。目の見えない者が集まって話したら楽しいでしょうね。不自由で協力できないけれど賛成です。」、「私は俳句をしておりますが、読み書きには、ほとんど苦労しています。そんな集まりができて読書や代筆がして頂けるようになったら、どんなに助かることでしょう」、「私は社会から点字を覚えています、会ができて点字をしたい人があつたら一緒に勉強してみたい。また家には大きい声で話もできないが、そんな会があつて月に一度か二度くらいどこかに集まって腹の底から大きな声で歌でも歌うことができたと思う。良いですね。」などと期待を込めながら話す人もあつて意を強くしたこともあつたと生川は振り返る⁽¹⁷⁾。

その頃、大島青松園に「杖の友会」があることを聞いたので照会したところ、「目の見えない者が集まると、日常の愚痴や不平も出

(15) 生川政郎「思い出」(『点字愛生』144号 1997年10月)、4頁。

(16) 注15に同じ、5頁。

(17) 注15に同じ、5頁。

ますが、それで慰め励まし合っております。会からまとめて事務所や園にお願いできますし、本当に良いことだと思います。愛生園でも作られたら良いのではないのでしょうか。」との返信をもらって会の必要を思ったことであった⁽¹⁸⁾。

その後、有本、生川の他、植木政市、影山英一、深田冽で「目の見えない者の会を作る準備委員会」を結成し、活動することとなった。しかし1951（昭和26）年5月、全患協によって「らい予防法改正の運動」が始められ、翌年は三園長による国会証言もあり、園内には思想的な対立が生じていた。それらの動向は、「目の見えない者の会」結成にも影響を与えることになった。

世話になっている軽症者から、「めくらの会」に賛成しないようにと言われた盲人もあり、準備委員会も抑圧を受けた。生川のところにも、毎日のように評議会議長が訪ね、「お前たちはめくらの会を作ると言っとるそうだが、やめときな、めくらに何が出来ると思っているのだ。めくらは部屋でじっと座っているのが一番よいんだ」、「また仮にできたとしても評議会で認められると思うとるのかい。困ったことや頼みたいことがあったら、不自由者懇談会に申し入れて要求してもらえばよいんだ」、「不自由者懇談会は愛生園のガンだ。めくらの会ができたならそのうえもう一つガンができる。めくらの会ができたとしても、牛の角に止まった蚊のようなものだ。牛の角の蚊だぜ…」と繰り返し中止するように圧力をかけられていた。

しかし、その間に5人は栗生盲人会の会則を取り寄せ、会則や会のあり方などについて検討を進めていた。ついに会設立に漕ぎつけたのである。

話を始めたあの日から一年半あまり、ついに、昭和27年9月27日、「会員相互の親睦を図り、生活文化の向上を目的とする」、「杖の友会」の発会式を迎えるに至ったのである。会員114名、集まって来る会員の杖の音が高

く、会場にあふれた会員の誰もかれも声が明るく、生き生きと弾んでいたのがいまでも記憶に残っている。実に感慨無量のものがあつた⁽¹⁹⁾。

生川の記述には、このように当時の結成の経緯が実に詳細に記され、会設立時の熱気が伝わってくる。

2011（平成23）年2月、長島愛生園「杖の友会」初代会長藤井清氏から盲人会設立に関して聞き取り調査を行うことができた。藤井氏は、「そういうことまで言わなければ、本当の盲人会の誕生についてはわからないと思い、少し長いけど、お話しました」と会設立の経緯について語ってくださった。当時の状況、会設立の背景を知ることのできる貴重な証言であるため、長文ではあるが、ここに紹介する。

ちょうど、その頃、映画の上映会が園内で始まったのですが、もし映画が三本あって夕方になっても食事の配膳がないんです。夏はいいんです。でも冬になると、それは冷たいままですよ。付き添いさんは自分は食べないで自分のところに持って帰って温めて食べますけど、私たち不自由者には冷たいまま出そうとしたんですね。

それからマンホール。当時は「あんきょい」と言いましたが。当時はそのふたが木ですから、木が腐っていて、杖ついてそこから落ちて、足先をけがすることが多かったんです。それと、盲導策。今は立派な鉄索のがありますが、昔は松の木などを切って、それを危険防止の柵にしていたんです。それも木ですから腐るんですね。それで崖から何人も落ちました。そういうことがありましたので、まあたとえば大きいことがそういうことがありました。それで、これでは、目の不自由な者について、どこに持って行けばいいかということを考えました。どこに持って行ったら

(18) 注15に同じ、5頁。

(19) 注15に同じ、6頁。

いいかということで、不自由者の付き添いさんがいるところに4人で持って行きました。

私はとりたてて、その4人と仲がいいわけではなかったのですが、寮が近い関係で、「4人でこういうことをやっているのだが、お前も入らないか」と相談されました。私も自治会で評議員をしていたので、関心を持っていないわけではないので、それではということで関わりました。そしたら、昭和27年の6月だったと思いますが、自治会の厚生委員という不自由者の世話をする役員に風呂に行く途中で呼び止められました。目の見えない者の会を作ろうとしているらしいがどうということかと聞かれました。その後、ちょうど一週間後くらいだったと思いますが、夕食がすんだところに、来てくれと呼ばれましたら、執行委員7名から一人で呼びつけられまして、「目の見えない者の会をつくるというが、どうしてじゃ」と一々聞かれました。それで、聞かれた挙げ句、「あんきよいのふたの板はすぐ直してやる。盲導線も張り替えてやる。それでいいんじゃない。職員と相談するから。そうして手近に直せるところは直すから。だからめくらの会を作らないようにしろ」と言われました。

それで私は、「自分は責任者ではないので、なんともいえません。」と言ったところ、「おまえが責任者であろうとなかろうと、おまえが作らんと言えぱそれで片付くんじゃ。」と怒られました。それでも私はひっこまずに帰りました。当時の会長は有名な田中文雄さんでした。

その後、1ヶ月後くらいだったと思いますが、夕方、本を読んでもらいに女舎に行っていました。そしたら准看の若い職員が来て、「園長先生が呼んでるので来て下さい」と言われて、私は「あ、監房に入れられるんだな。」ととっさに思いました。当時は、全患協が園長を辞めさせようと運動していた頃だったので、そう思いました。それで、一

度舎に戻って、洗濯物について一言言ってから、舎を出ました。本館に行ったら、園長先生がおっしゃったのが、「おまえは森田竹次のところに入出入りしているそうじゃないか。」と言われました。「おまえは共産党の勉強はしているのか。」と言われたので、「私は共産党の勉強をしていないので、共産党ではありません。」と言いました。「今日はおまえの言うたことを信用する。おまえの言うことを信用して、めくらの会を作ってもいい。」と言ってくれました。そして分館長に向いて、「会を作るいうたら、ノートやペンが必要だから渡すように。」と言いました。私に向いては、「分館長からもらうといい。」と言いました。

ところが、当時の園内はめくらの会を作るということについて、激しい反対がありました。目が見えないで、健康者のところに行ってお茶を呼ばれたり、時にはご飯をご馳走になるということがありましたが、その人たちがめくらの会に入るのなら、うちに来てくれると言われました。そういう中で、盲人会が誕生したのです。そういうことまで言わなければ、本当の盲人会の誕生についてはわからないと思い、少し長いけど、お話ししました⁽²⁰⁾。

二人の証言に見られるように、当時の長島愛生園では多くの反対、そして抑圧のなかで、盲人による組織が結成されていったのである。

(3) 邑久光明園「杖の友会」

邑久光明園盲人会会長であった藤原作夫は、盲人会創立50周年を迎えた2004（平成16）年、盲人会を設立することになった背景について、次のように振り返っている。「それまでは病気が治るという保障も希望もなく暗い毎日でした。特に盲人の場合は目が見えないということもあって、何もしない事もなく無為に日々を過ごしておりましたが、プロミンによって病気が快方に向かい治ると

(20) 藤井清さんからの聞き取り（2011年2月18日）。

いう希望が出てまいりました。』⁽²¹⁾と、化学療法により、それまで不治の病であると言われていたハンセン病が治るという、希望をのぞかせている。

邑久光明園でもプロミンの治療が始まることにより、療養所の空気が一変した。たとえ目が不自由であったとしても、病気が治るという希望は、「何かなす事もなく無為に過ごす日々」から脱することであり、それはやがて戦前の「心友会」とは異なる組織作りへと盲人たちを向かわせた。

前述した藤原作夫も「これではいけない何かをやらなければならないという考えから会をつくり会活動を通して生き甲斐のある充実した療養生活を送っていこうという気運の盛り上がりが会の結成に繋がった大きな要因ではなかったろうかと思われます。』⁽²²⁾と、プロミン登場により、会結成の気運の盛り上がりにつながっていったことを振り返っている。

戦前から存在していた慰安的な要素の強い「心友会」とは別の組織作りを試みようとした彼ら、彼女らであったが、その経緯はどのようなものであったのだろうか。戦前・戦後を知る盲人会現会長、森山栄三氏は、当時を回想して、次のように話された。

ただ、それだと発展性がないと、当時の初代会長の小川義秋さんが言ってね。そんな盲人会やったらつくらんでもええんやないかと。戦争中は秋になると青年団や消防団が二キロ足らずのさつまいもをくれていた。だけど、それだと文化性がないんじゃないかということから発展、解消しようと。解消したのは3月か5月くらいね⁽²³⁾。

また当時、開眼手術の成功について、ラジオや岡山日赤病院からの巡回診療などで聞き、医者

招く運動などが盲人会を作ることできればよいという話が持ち上がったという。会の規約作りのために、当時の入所者自治会文化部長の望月拓郎に依頼し、資料などを用意してもらった⁽²⁴⁾。

しかし、当時、らい予防法闘争が始まった頃で、自分たちの運動も政治運動であると誤解され、反対意見もあった。さらに「盲人会」という名前に抵抗がある人もおり、「杖の友会」という名の親睦団体として出発した。この点について、金地慶四郎は次のように語っている。

ただ目が悪くなって間もない人はね、盲人会に入るということは自分が盲人になったということを決定づけることでしょう。自分自身が盲人になったということを認めることはなかなかしんどいことでね。つらい。盲人になってもまだ盲人会に入る決心できない人がたくさんいたよ⁽²⁵⁾。

「目が見えなくなる」ということを自身で受容することは難しいことであった。会への入会を勧める側もそれを完全に受容した中で取り組んでいたわけではなかったであろう。しかし、開眼手術への期待、園内でのより住みよい生活づくりや生き甲斐を求める活動をするため、会を組織し、受身だけではないあり方を模索しようとしていた。この動きはまさにその表現ではなかったか。「道路や柵をつけてほしい」、「杖やバケツや靴に名前を書いてほしい」という、盲人が日常生活で困っている要求から始まった「杖の友会」には90%の人が加入することになったのである⁽²⁶⁾。

(4) 多磨全生園「盲人会」

次に多磨全生園の盲人組織設立の経緯についてみていくことにしたい。全生園にも盲人会結成に

(21) 藤原作夫「盲人会50年の歩み」(『楓』495号 2004年1月)、11頁。

(22) 注21に同じ、11頁。

(23) 森山栄三さんからの聞き取り(2011年2月15日)。

(24) 金地慶四郎『どっこい生きてるで』1990年、46頁。

(25) 注24に同じ、46頁。

(26) 注24に同じ、46頁。

むけて次のような動き、背景があった。

新薬プロミンの効果が現れてくるとともに、軽症者の人たちは、野球や庭球、その他の趣味、園芸などに生活の楽しみを求め、年に一度か二度それぞれに会場を設けて発表会を行いました。娯楽では映画上映ですが、年ごとに増えて月に8回くらいまでになり、同室の晴眼者はみんな出払い、盲人だけがいつも留守番のようなかたちで、ぼつんと取り残されていたんです。こうしたことが、自分たちの力でなんとか生活に潤いを持とう、それには盲人の会をと言うまでになったんです。それが具体化して、発起人が集まったのは、昭和29年の2月ごろでした⁽²⁷⁾。

しかし、その設立は決して平坦な道のりではなかった。多磨盲人会結成10周年を振り返る座談会において、盲人会員の菊池儀一と田中金一、山本隆三郎は盲人会を結成しても、自治会が正式に文化団体として認めてくれるかどうか、そして何よりも晴眼者が書記として手伝いに来てくれるかどうか大きな不安があったと述べている⁽²⁹⁾。「あのときは盲人会を作って、いったい誰が世話をするのか、自分で書き物もできない。愛友会に含まれているのであれば、それほどの差別があるわけでもないから、そうまでしなくてもいいではないか」⁽³⁰⁾という意見も出されたのである。

愛友会とは、戦後間もない1946（昭和21）年4月1日、多磨全生園において発足した不自由者の会である。それは「不自由舎に自治会への願いごとやら日常の不自由なことを訴えるにも、個々に要求しては聞き入れない点があり、不自由な者の

団体を作ろう」、「お互いの幸福を作るには団体でなくてはだめだ」という大勢の人の声の盛り上がりによって結成されたのであった⁽³¹⁾。

このように、多磨全生園には盲人会結成以前に愛友会が存在していたこともあり、当初は盲人だけが独立して会を結成することに反対意見が出されたのであった。

その当時について、前述した菊池儀一、山本隆三郎、さらに桂玲人は次のように回想している。

愛友会の方では大変憤慨していたわけで、自分たちになにか足りないものがあって、盲人が離れていくかのようにとられてね。しかしそうじゃなくて、盲人は盲人自身の立場をよりよくしようと言うわけだったと思うのです⁽³²⁾。

ところが愛友会から話し合いたいという申し入れが来て、今までやって来たのだから、これからも一緒にやって行けないことはなからうとね。そこでぼくは、他の療養所にも盲人会があるのだから、われわれも自主的にやって行きたいからと。当時愛友会の会長だった三木辰三郎さんは盲人でしたから、個人的にはぼくらの主旨に賛成していたんです。その後何回か会合を重ねた結果、愛友会でも理解してくれたわけですから⁽³³⁾。

…ですから愛友会の名のもとにいろいろな要求やお願いを掲げても、おのずと目明きと盲人では明らかにギャップが生じてくるわけですね。ですからこの際、盲人は盲人だけで独自の会を作った方が、お互いにいいんじゃないかという声が、誰からともなくおこってきたんですね⁽³⁴⁾。

(27) 山本隆三郎「多磨盲人会結成」（多磨盲人会編『望郷の丘』1979年）、221頁。

(28) 山本隆三郎発言「座談会 盲人会結成当時をかえりみて」（『道標』第20号 多磨盲人会 1964年1月）、34頁。

(29) 注28に同じ、35頁。

(30) 注28に同じ、田中金一発言、35頁。

(31) 「座談会 戦後十年の不自由者の生活」渡辺万造発言（『多磨』9月号 1955年9月）、72頁。

(32) 注28に同じ、菊池儀一発言、35頁。

(33) 注27に同じ、222頁。

(34) 注27に同じ、桂玲人「盲人会の独立」、136頁。

このように、初回の話し合いでは反対意見もあり、結論を出すことができなかったものの、その後、再度話し合いを行い、結果的には独立することとなった。

そして、実際に会が結成されると、実に160名以上の盲人が会に参加した。山本隆三郎は、その参加者の割合を「99パーセントでした」と述べ、そういう中で「最初の役員たちはそれぞれノートを持ってくるとかペンや便箋を持ってくるとかして、皆が建設的な気持ちで一つになったといえる」⁽³⁵⁾と感慨深く回顧している。次の言葉に見られるように当時は現在の「盲人会館」のような集会所もないまま活動が進められた。

それから会場がなかったでしょう。第二カクリの空室を借りて明日の会合のことだとか、これからどうするとか夜遅くまで12月の寒い火鉢一つない部屋でよくやったもんだね。それに帰りは雨が降ってみんな肩を抱き合うようにして帰って行った。書記が仕事をする場所がない。会員の中で具体的な要求も出るようになり、最初に出てきたのが「自分たちの会館が欲しい」ということでした⁽³⁶⁾。

多磨全生園入所者の鈴木綾瀬は、1957（昭和32）年発行の『道標』第2号に盲人会に対する思いを綴っている。

昔の盲人は、死と云う壁に向かって、貧乏ゆすりをするしか知らなかった。ところで今日では医学の進歩も大変なもので、どんな病気にも関心がもたれるようになった。それはプロミンなどによって癒えるのだと云う、治療への期待が再び芽生えたからである。三人寄れば開眼手術、整形、そして退園のことなどが話題になる程病者としての現実も余程明るくなった。

従って私たち、とうてい退園出来ない失明者でも病勢がこれ以上は進まないという大体の見通しのつけられる現在、文化的生活の向上という面で、その昔とはくらべものにならない。私たちが、そこに生きがいを見出そうとしても、それは当然だと思う。けれども、そういったものは天から降ってくるとか、地からわいてくるとかいうものではない。2、3年前、私たちの舎の前に公会堂が建てられた。鉄骨をつつむモルタル、まわり舞台、正面、観客席の二階は二つに仕切られ、職員と患者の席に分かれている。映画、テレビ、卓球、それに興ずる晴眼者の声はほとんど絶えることがない。そして冬、その千何百人を収容する娯楽の殿堂は、黒く冷たく日陰を私たちの舎の縁先までのばしてきて、私たちは、ただ寒さにふるえるばかりであった。

映画が、あるいはテレビが盲人の楽しみになり得なくとも止むを得ない。楽しみもまた自分たちからも働きかけて創り出さなければならぬものだから。だが、それには私たちは、杖一本、メガネ一つという生活になくてもはならないものから、その支給を訴えなければならぬという—いわばそんな低い所にいたのであった。⁽³⁷⁾

続けて「今、盲人会ができ、その動きの中で、私たちは何か喜びを見出そうとしている」⁽³⁸⁾という言葉が示すように、何か一つでも「喜び」を見出そうとする鈴木の実感の思いが伝わるのである。

かつて多磨盲人会の世話係であった大竹章は盲人会設立の様子を次のように記している。

「人に助けられてやってもやったとはいえない」と、自らを起ち上がらせることから始められた。唇で履物を探してはき、歩けな

(35) 注28に同じ、山本隆三郎発言、36頁。

(36) 注28に同じ、山本隆三郎発言、36頁。

(37) 鈴木綾瀬「めしいの今昔」（『道標』第2号 1957年9月）、10-11頁。

(38) 注37に同じ、10-11頁。

いは仲間が背負い、空家をてんでんとして
集会を開き、やがて盲人会が生まれた。⁽³⁹⁾

多磨全生園の盲人会は、この言葉にある通り、
まさに「自らを起ち上がらせること」から始まっ
たのであった。

(5) 松丘保養園「杖の友会」

松丘保養園の盲人組織の結成についてみていき
たい。その背景について、盲人である志村満は次
のように記している。

長い闘病生活の中にあって我々盲人は、如
何にすごして来たのであろうか。一般的に
言って音によって文化を吸収し、娯楽を求め
て来たといっても過言ではあるまい。各室に
備えつけてあるラジオがもっとも身近に我々
の要求をみだし慰安を与えている。

盲人の中には熱心なクリスチャンや、仏教
徒が信仰によって光を求めている人が多
い⁽⁴⁰⁾。

他園と重なる点でもあるが、盲人の娯楽や慰安
が無い中で、何かしらの生き甲斐を信仰など
によって求めようとしていた様子が伝わる。しか
し、志村は続けて次の様に記す。

しかしながら我国のらい盲界の過去は一言
にして「ねむっていた」と言える。盲だから
と言う概念が、自他共に働いて諦めと、事な
かれ主義となり色々な希望や計画も実行に移
す事が少なかった怨が強かったと言える⁽⁴¹⁾。

療養所では戦後においても、職員の不足から不
自由者介護制度という入所者が不自由な同じ入所

者の世話をする形式がとられていた。そのため、
この志村の発言にあるように「諦めと、事なかれ
主義」が盲人患者の心を支配していたのではない
かと考えられる。必要以上に世話係の手をわずら
わせないようにするためには、自己の要求をな
るべく抑え、おとなしく生活することが最良の道だ
と考えられていたのだろう。

当時の盲人たちの暮らしについて、1991（平成
3）年の盲人会会長であった佐々木文男も「当時
の盲人たちは、不自由舎病棟に晴眼者と7、8名
の雑居部屋に共同生活し、娯楽の手段もなく、部
屋の隅で暗澹とした日々を送るのが常であっ
た」⁽⁴²⁾と記している。

そのような中で栗生楽泉園の友人から呼びかけ
られ、松丘保養園でも盲人組織の設立に対する気
運が高まっていったという。また、盲人の生き甲
斐とは何か、進むべき道は何かなど悩む中、園や
自治会の援助も受け、1953（昭和28）年、らい予
防法改正運動に突入したその秋に、十数人が発
起人となり、「杖の友会」を結成したのであ
った⁽⁴³⁾。

初代会長には落合幸夫がなり、役員各氏と会員
90余名が、共通の障碍や悩みを共に助け合っ
て、文化的にも向上し、少しでも明るい生活を望
んで龍頭蛇尾にならないよう前進を続けた⁽⁴⁴⁾。
落合幸夫は40代の若さで他界してしまったが、
当時盲人会会長であった嵯峨悟朗によって読ま
れた弔電から、落合が盲人会の創立者であり、大
黒柱として会のために一身を捧げてきたことが
よくわかる。

盲人会の生みの親であり、育ての親でも
あった落合さんよ、貴方は思えば8年前の
秋、率先して会を作り、会長としてそれまで
冬眠状態を続けてきた私達盲人の福祉の増進

(39) 大竹章『無菌地帯』（草土文化、1996年）、296頁。

(40) 志村満「暗から光を求めて」（『甲田の裾』第25巻9号 1954年9月）、8頁。

(41) 注40に同じ、8頁。

(42) 佐々木文男「松丘保養園八十周年記念をむかえて—ここに思う時—」（『松丘保養園創立八十周年記念誌』松丘保養園 1991年3月）、183頁。

(43) 注42に同じ、183頁。

(44) 注40に同じ、9頁。

と文化の向上をはかり、より明るく意義のある療養生活を築こうと、たとえ盲人であっても努力して行こうというスローガンのもとに、当時全く四面楚歌の中であって鉄の如き信念と正義感に燃え、ねばり強く、然も烈々なる気迫をもって事に当たり、私達会員を指導して下さったのであります。…⁽⁴⁵⁾

落合幸雄は人望も厚く、指導力もあったため、会員たちは皆貴重な人材を亡くしたことに落胆した⁽⁴⁶⁾。詳細な資料は残されていないが、ここから松丘保養園でも盲人たちが組織をつくるにあたり、少なからず反対があったことがうかがえる。それに対し、落合は「ねばり強く」、「気迫をもって事に当たっていた」ことから、会員たちにとっては実に良き指導者であった。

「杖の友会会記録」の冒頭には以下の文面が続いている。

予てより我々失明者は、相互共愛の生活を計る目的のもとに同士と相計り、自ら進んで発起人となり、其の相談を内定中の處、漸く其の相談も進展具体化し、いよいよ今回本格的な機関を結成する運びとなり、此處に其の一步を踏出す形式となった。⁽⁴⁷⁾

かつての盲人のおかれた状況や療養所での生活を振り返り、その生活を少しでも良いものにしていこうと考えた時、「其の一步」は決して小さくはなかったのではないのだと考えられるのである。

以上、5園の設立経緯について順にみてきた。本稿では調査の関係上、全園を取り上げることができなかったが、他園においても駿河療養所では1952（昭和27）年、日盲連長島事務局長が静岡県盲人会連合（現・静岡県視覚障害者協会）への加

入勧誘に来所したことが動機となり、1953（昭和28）年4月1日盲人会の前身である「杖の友会」が結成されたとある。⁽⁴⁸⁾ これは、当時一般社会でも始められた盲人の権利を獲得運動が療養所にも及んでいた点において興味深い。

また、東北新生園では、松丘保養園同様、栗生楽泉園からの呼びかけによって、会を組織することとなった。それは一通の栗生楽泉園からの手紙が届いたことによる。

当時、盲人会副会長であった古谷巖は創立15年を振り返り、盲人会発会当初について以下のように述べている。

昭和29年2月初めの頃だったと思う。栗生盲人会より次のような手紙がとどいた。全国のハ氏病療養所の中で、盲人の組織がないのは貴園だけのようだが、なぜ作らないのか、早く組織を作り、全国の盲人が互いに手をつなぎ、今後あらゆる諸問題に対処すべきではないかという内容であった。この事がきっかけとなり、数名の発起人が、毎日日赤会館に集まり、協議を重ねた結果、組織の必要性を感じ、規約の作成にかかった。2ヶ月あまりで草案も出来、自治会や園当局の認可を受ける事ができた。そこで盲人全員に呼びかけ、大会を開いて初代会長に太田さんを推し、昭和29年6月25日に杖の友会として発会式をあげたのである⁽⁴⁹⁾。

このように1950年代に次々と全国の盲人組織が発足し、「全国の盲人が互いに手をつなぎ、今後あらゆる諸問題に対処すべき」だという気運が高まっていった。その背景には、化学療法の登場により、軽快退所者や労務外出者が出始めたことがあった。比較的軽症な患者がより重度の患者の看護・介護を行う、「患者付添」によって療養所が

(45) 嵯峨悟朗「弔辞」1961年12月5日、『点字松丘』第21号（1951年12月）に掲載。

(46) 佐々木文男「松丘保養園八十周年記念をむかえて—ここに思う時—」『松丘保養園創立八十周年記念誌』松丘保養園 1991年3月、184頁。

(47) 「杖の友会会記録」1953年10月28日、杖の友会「昭和28年11月記録簿」、松丘保養園所蔵。

(48) 国立駿河療養所患者自治会『入所者三十年の歩み』1975年9月、自治会公認団体となったのは翌年の1954年であった。

(49) 古谷巖「十五年の歩み」（『奥の灯』第5号 1969年10月）、8頁。

支えられていたため、盲人たちにとっては、大きな不安材料であった。

やがて各園の盲人会結成の動きは、1955年5月、全国のハンセン病療養所の盲人組織である「全国ハンセン氏病盲人連合協議会」（全盲連）として結実した。1956年、菊池恵楓園の機関誌である『菊池野』において「杖の友会」幹事一同は、座談会を開き、全盲連結成に対する思いを次のように語っている。

…ようやくここ2年前から友園の盲人会とも交流することが出来、盲人会の考え方というものが変わって来たのであります。いままでの相愛互助、卑下しあきらめていたものが新しい時代に添って、そのあゆみにつづかなければならないという自覚が出来たのでありまして、このめざめが大きく全盲連の組織となったのであります。これは画期的な事だったと思うのであります。人に寄り頼むというだけの考えから脱却して、われわれの生活の上にわれわれ自身であかりをつけるという考えを持つようになったということは、これは大きな出来事ではなかったかと思ふのである。⁽⁵⁰⁾

各園で誕生した盲人組織は、全盲連という形になって、その一步を踏み出したのである。「私達盲人が不自由な常態にありながら何故このように立ち上がらなければならなかったか、お互いに盲人であれば今さら云う迄もないことであるが、晴眼者に対し私達不自由な者の立場を少しでも理解して頂く意味においても、自らが努力し働きかけねばならないと思ったからである」という言葉は、周りに訴えていく足場としての組織を求める盲人の思いを強く示している⁽⁵¹⁾。

盲人個々の思いは、各園の盲人組織となり、やがて全国に広がっていった。その過程において、彼ら、彼女らの動きは、自らの権利を求めるだけ

ではなく、療養所内で理解を求め、お互いの生活上のために助け合い、融和を図る意味において、重要な位置を占めていくこととなったと思われる。

盲人会設立以後の各園盲人会の活躍は、ここで記すまでもない。特に職員介護切替の要求闘争（1964年のいわゆる「六・五闘争」）では盲人たちもまた熱心に運動を展開したのであった。

おわりに

以上、本稿では、全国各地の療養所における盲人組織がどのような経緯で設立されたのかをみてきた。これはどのような状況に置かれても立ち上がろうとした人たちの軌跡である。

本文の中でもしばしば触れたが、盲人会の発足当初、晴眼者が盲人らに浴びせかけた言葉は盲人に対する差別をあらわにするものであった。「盲に何ができる」、「盲人は邪魔になる」、「盲人のくせに…」といった差別的な言葉が容赦なく盲人にぶつけられた。いわゆる「差別的ななかの差別」である。一方において、盲人の中には患者付添などの激務の果てにハンセン病の合併症、殊に眼科的合併症を重くし、遂に視覚障害を持った者も少なくなかった。

園内で最も反対の強かった長島愛生園の自治会史である『隔絶の里程』には次のように記されている。

無理解や障害を克服して会を誕生させた盲人たちのエネルギーは、その後趣味、文化、生活改善などでめざましい活動を展開するようになった。それは盲人といえば「押入を背にしておとなしく座っているもの」といわれた人たちの「自分自身でも驚くほど」の変化であった。⁽⁵²⁾

療養所の中にも差別はあった。しかしそれ以上に辛かったことは、盲人となった自らを受け入れ

(50) 「座談会盲導鈴は鳴る」江上宗夫氏の発言（出席者：「杖の友会」幹事一同、『菊池野』第5巻9号 1956年2月）、2頁。

(51) 竜尾久志「今後の全盲連に望む」（『燈台』第5号 1955年5月）、1頁。

(52) 長島愛生園入園者自治会編『隔絶の里程』（日本文教出版株式会社、1982年）、160頁。

ようにすることであつたに違いない。

「諦め」から一步踏み出そうとした人々の記録は特筆に値する。盲人である自らを、自律した「人」として立ち上がらせようとするところから始まった小さな一步。それはやがて自分たちだけではなく、多くの人たちをも励ます活動へとつながっていった。

「差別の中の差別」を解消したのは、盲人自身の活動、すなわち盲人の晴眼者に劣らぬ活動であつた。差別しないであほしいと頼んだのではない。差別されない自らを確立したのである。盲人会の活動の意味をこれらの点からも再認識する必要があるだろう。

《主要参考文献一覧》

全国ハンセン史病患者協議会『全患協運動史』一光社 1977年
全国ハンセン病療養所入所者協議会『復権への日月』光陽出版社 2001年
国立療養所松丘保養園『松丘保養園創立80周年記念誌』1991年
松丘保養園慰安会『甲田の裾』
東北新生園入園者自治会『忘れられた地の群像』1997年
東北新生園盲人会『奥の灯』
栗生楽泉園患者自治会『風雪の紋』 1982年

栗生楽泉園盲人会『湯けむりの園』 1986年
栗生楽泉園盲人会『続湯けむりの園』 1996年
多磨全生園患者自治会『俱会一処』一光社 1979年
多磨盲人会『道標』
多磨盲人会『望郷の丘』1979年
国立駿河療養所『入所者三十年の歩み』1975年
長島愛生園入園者自治会『隔絶の里程』 日本文教出版株式会社 1982年
長島愛生園盲人会『点字愛生』
邑久光明園入園者自治会『風と海のなか』1989年
邑久光明園入園者自治会『楓』
邑久光明園盲人会『白い道標』1995年
邑久光明園盲人会『白杖』
大島青松園盲人会『わたしはここに生きた』1984年
大島青松園盲人会『灯台』
菊池恵楓園入所者自治会『壁をこえて—自治会八十年の軌跡』2006年
菊池恵楓園入所者自治会『菊池野』
始良野編集部『始良野』
国立療養所奄美和光園『創立40周年記念誌』1984年
沖縄愛楽園『開園30周年記念誌』1968年
国立療養所沖縄愛楽園『開園50周年記念誌』1988年
国立療養所宮古南静園『創立70周年記念誌』2001年
大竹章『無菌地帯』草土文化 1996年
金地慶四郎『どっこい生きてるで』1990年
谷合侑『盲人の歴史』明石書店 1996年

(きん きぶん)